

57 書家 マーヤ・ワカスギ (2021年5月18日)

ポルドー在住の書家 マーヤ・ワカスギさんは、6歳から書道を習い始め、高校生の時に初めて個展で作品を発表し、書道の名門である大東文化大学で勉強されました。2017年の大河ドラマ「おんな城主 直虎」の題字を揮毫されました。若い頃から書の才能を発揮していたマーヤさんですが、意外にも美容師として働いた経験もお持ちです。しかし、2011年に東日本大震災が発生し、ご自分が本当にやりたいことを見つめ直したときに、それは書であると確信を持たれました。海外で仕事をしたいと考えていたマーヤさんは、フランスでアーティストとして活動することを決意して、フランスに移住されました。

マーヤさんの作品を拝見すると、穏やかな人柄からは想像できない力強さを感じます。書は、重ね塗りをする油絵とは違って、やり直しがきかない一発勝負です。お話を伺うと、筆を持つときはご自分の持つエネルギーを集中させて作品を書かれるとおっしゃいます。書を書くときは通常は黒い墨を使いますが、マーヤさんは、黒色にメタリックの顔料を混ぜたり、文字ではなく造形的なデザインを書かれることもあります。マーヤさんの作品は、黒色を基調とした抽象画にも見えることから、漢字を知らないフランス人でも、作品の魅力を感じ取ることができると思います。



BRIGHTER DAY

© GALERIE MIKIKO FABIANI

## パリの日本大使館員がフランスで見つけた日本

しかし、マーヤさんの作品は絵画ではなく、あくまでも書です。幼いころから訓練を重ねられてきたように、今でも毎日、古典臨書（古人の優れた書を見て習うこと）を欠かしません。書は、西洋のカリグラフィーと比較されることがありますが、美しい形の文字を書くだけが目的ではありません。書は、紙の余白、墨による文字のにじみやかすれ、筆が流れる勢いを大切にします。マーヤさんの作品には、こうした書の基本精神が表れています。

マーヤさんは、師匠から、「書は人なり」を表すもので、精神を鍛えていくものだと言われました。書は、芸術としての表現方法の一つですが、自己鍛錬の道でもあります。マーヤさんは、書の精神性を守りながら、フランス人にも感動が伝わる作品を生み出されています。

マーヤさんは、ボルドー近郊の公立の小学校や中学校で書を教える活動もされています。書の授業を通して初めて日本文化に触れる子どもたちに、書を楽しんでもらいたいとおっしゃいます。筆を使って文字を書いた経験は、楽しい記憶とともに、子どもたちに新たな世界への扉を開いてくれることでしょう。



© Maaya Wakasugi

*Comme le vol vigoureux  
du dragon,  
comme la danse gracieuse  
du phénix*



© Maaya Wakasugi